



ジャーナリストは隣人！（＜LINK を読む＞）

仲井，雅史

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:65-67

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499188>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499188>



ジャーナリストは隣人！

仲井 雅史

本欄の執筆依頼を受けて、かなり後悔している。まずは担当者の人選ミスであると断言しておこう。『LINK』一五号を読む」である。インタビューシリーズ「歴史研究の隣人たち」は、報道現場からの報告で、朝日新聞編集委員の中村俊介さんが登場された。同業者で肩書（編集委員）も同じという大きな勘違い（弊社には文化財の専門記者は実在しない。すべて兼務）が縁での執筆依頼だろう。が、中村氏は大手紙の専門記者、いわば文化財分野の報道で第一線に長く立ってきた大家である。その人の発言に対して何を書けと？

閑話休題。一読して中村氏の発言内容と、筆者の現状認識に共通点の多いことを確認した。そこで困った。「その通りです」では、何もあらためて書く必要がないではないか。：。「よくお読みください」というひとことに集約されてしまう。正直、それ以上でもなく、それ以下でもないのだ。が、ここで筆を置くわけにもいかないだろう。筆者自身の経験と重ね、

本欄をつづつてみたい。批評とは趣が異なるが、ご海容いただきたい。

中村氏も述べられているが、文化財分野の報道は埋蔵文化財関係が多い。高松塚古墳の壁画発見報道をきっかけに、いわゆる考古学ブームに合わせるように報道機会が増えたというのが定説。こうした記事を「ふるもの」と呼ぶ。かつては「ふるもの」の名物記者がいた。学術調査をリードしたこともあり、兵庫県内の旧石器研究史に輝く弊社の一九五九年「家島諸島の総合学術調査」もその一つである。また県内の遺跡を記録した連載『祖先のあしあと』（後に書籍化）は今でも貴重な記録資料として評価されている。戦前戦中の皇国史観から解放され、地域の歴史について市民の興味関心が高まりつつあった時代。小野・焼山古墳群など遺跡保存運動とも連携した第一世代による「熱い時代」であった。

筆者は中村氏より年少（推定）の五〇代。大学では美術史を専攻したものの、多くの時間を考古や古代史の友人と過ご

した。第一世代の先生方はすでに退官されていたが、その気風は引き継がれており、「病院建設現場で遺跡が出た。建設が遅れると亡くなる患者がいる。さて、どうするか」といった議論が学生間で自然発生的に行われていた。こんな空気に知らず知らず染まっていたようだ。教科書とされた中には、新納泉著『ジャーナリズムと考古学』（岩波講座「日本考古学 七」所収）があつたけれど、「マスコミで文化財取材を」などと考えたこともなかった。バブル崩壊後の就職氷河期。文科系の大学院生を採用してくれる企業はマスコミぐらいだった。

入社後は中村氏と同じく、警察担当を振り出しに地方勤務、そして時々、文化部である。ちなみに弊社も駆け出し記者に人権はなく、ハラスメントという概念は存在しなかった。ただ、読者の中には新聞社の就職に興味のある学生さんも天文学的確率でえられるかもしれない。新人の労務、環境は改善が進んだことだけは補足しておく。さて、文化部の記者と

しては歴史・考古、学術、博物館関係を主に担当し、三〇歳で県史をテーマにした長期連載「ふるさと全史」に参加する幸運（当時は苦行と感じていた…）にも恵まれたが、三〇年近い社歴のうち延べ六年間の担当に過ぎず、専門記者というのはおこがましい。弊社文化部は現状、考古・歴史分野を担当する記者はおらず、少人数がかなり広い分野をカバーしている。筆者も文芸・出版の紙面と碁将棋のデスクほかを兼務している。文化財分野には手が回らない。

私事で放談が過ぎたようだ。客観的にみて、文化分野の記者として、筆者はサラリーマン化した第二世代に属するだろう。個人的には「熱い」第一世代に対し「クール」と定義したい。ここでクールと書いたが、やや自虐と、そこに第一世代に対する敬意と感謝を込めている。辞表を胸に研究者や埋蔵文化財担当者が開発と対峙し、市民が座り込み、マスコミが議論を展開する——第一世代の熱があつたからこそ、遺跡（最近では文献史料

も）調査と公表（マスコミ発表、現地説明会）を前提に仕事ができただの。第一世代が残した大きな遺産といえる。

では、第二世代はどうあるべきなのか、あるいはあるべきだったのか。クールにやっついて良いのか。不幸にも第一世代の経験は弊社内ではまったく引き継がれていない。歴史・考古の第三世代が育っている気配もない。「何してるねん」とおしかりを受けそうだが、中村氏も触れられている社会背景が大きく影響している。紙面購読からウェブへ。この流れ自体は否定するものではないのだが、P V（ページ・ビュー。ウェブの総アクセス数）とC V（コンバージョン。商品購入や会員登録などの成果）を物差しとした記事評価が主流となってきた。残念ながら、文化面の記事のP V、C Vはお恥ずかしい限りであり、少しでも「かせる記事」へと、人材や取材時間をシフトしている。分かりやすくいえば、文化なら学術より芸能というわけである。

例えば、じっくり読んでもらえる考古・

歴史系記事となると、専門知識と時間、手間が必要。頑張つて書いたとしてもPVをかせげる保障はない。それなら、有名人が登場する会見を取材する方が専門知識も手間もかけず、それなりのPVをかせげるというわけだ。社内ではリアルタイムで記事アクセスが表示されるモニターがあるが、わいせつ事件と不祥事ばかりが上位に並ぶのを見せられると、めまいがする。だが、これが現実だ。

そもそもこうした市場原理に従うと、PVのとれない分野に人を投入しない。専門記者も育たず、兼務が増えて記者個人の余裕がなくなる……という循環に入っている。「いやいや、文化記事の需要はある」と本誌の読者なら思われるかもしれないが、期待に沿うレベルを確保できる記事を生産する余力はもはや現場に残っていないと正直に報告しておく。文化報道は「岐路」にあると書きたかつたのだが、すでに「ルビコン川を渡った」というのが筆者の実感。ここで第二世代として「文化記事の防波堤となる」と宣

言すれば格好よいのだけれど……。第二世代、瀕死である。

情報があふれる現代。「長くやつてきたキャリアと、それに対する信頼性」が旧メディアが生き残る余地と中村氏はいう。大いに賛同し、筆者もいずれ揺り戻しがあると考えてはいる。が、それまで組織（例えば文化部）の体力が持つという確信を持ってない。また、情報が増えた分、読者の興味関心が細分化している。一定数（PV、CV）の読者を確保できる歴史・考古分野の素材が果たしてありえるのか、という問題もある。そこで、より「物語」が必要とされるだろう。すでに本誌で物語の問題点は提示されているので繰り返さないが、諸刃の剣である。読者が「読みたい」ものばかり追求した先に、報道はどこへ向かうのか、想像もしたくない。

危機ばかり訴えても詮無きことだ。ただ、特効薬は見つからない。「地域のことを知りたい」という市民、研究者、マスコミによる運動体、コミュニケーションとして

文化記事の需要を拡大していけないか。クールなままでは先がないというのが第二世代としての反省である。ただ、冒頭の現状報告のように表面張力で維持しているギリギリの運営。熱くなる余力はないという弁明を許してほしい。

最後に、今回一番面白かったのが「歴史研究の隣人たち」というタイトルであつたことを告白しておく。研究と報道は「共犯」。そう無意識に自白しているではないか……。共犯となれば、歴史研究側、とりわけ大学教育にも報道の現状を生んだ遠因があるのでは、との問い掛けで本稿を閉じたい。